あいつの切り札

N・S・P「夕暮れ時はさびしそう」

「『夕暮れ時はさびしそう』と言っても、今の切り札じゃないからねえ。ぼくらの場合、常に一番新しい曲に全力を賭けてますからね。その意味においては、今度発売したばかりの『見上げれば雲か』が切り札というか、切り札になってくれればいいなと思っています」

天野滋は「NSPの場合、切り札はやはり『夕暮れ時はさびしそう』だろうか？」というぼくの問いに、とまどいながらもそう答えた。そんな天野の答えを聞いて、ぼくは「オヤッ」と意外に思わずにはいられなかった。はたからながめていれば、確実に切り札と思えたものが、当事者から見ればすでに過去のものでしかないということがわかったからだ。

「やっぱり、切り札ってぼくらにはないんだよ」

中村貴之と平賀和人はそう言い、互いの顔を見つめあった。

「でも、たくさんの曲の中でこれは？と思えるのは何曲かあるんじゃない」

そうたたみこむように問いかけると、3人から「『さよなら』『夕暮れ時はさびしそう』『赤い糸の伝説』『八十八夜』『見上げれば雲か』の5曲かな」という答えが返ってきた。

デビュー曲『さよなら』があって今日のNSPがある

天野は語る。

「『さよなら』はぼくらのデビュー曲だから、今ぼくらがいるのはすべてあの曲のおかげ。その点においてはどうしても忘れられない曲です。後の4曲は、その時々の状況において、どうしてもヒット曲が欲しいと思って作って、その結果ヒットして、ぼくらは生き続けることができました」

NSPは昭和48年6月に『さよなら』でデビューした。初めの1年間は右も左もわからない状況の中で、ただ与えられたスケジュールを一生懸命消化した。シングル、アルバムともに2枚出した。だが、決して売れたとはいえなかった。

「田舎ではスターだったが、東京に来たらスターではなかった。アルバムを2枚作ったところで曲のストックもなくなってしまった。もう不安でしかたなかった」（天野）

デビューして1年経ったところで、彼らは彼らなりに自分の行く末を冷静に見つめた。

「もともとぼくは楽天的な性格なんですが、あのときは天野君の悲壮感におされたのか、思わずどうしようか、と思いました」（中村）

「3人で話し合って、とにかくヒット曲を出そうという結論になったんです」（平賀）

アマチュアから幸運にもプロになれたが、プロの世界は甘くはない。成功すれば天国だが、失敗すれば地獄でメシも食えなくなる。そんなことをひしひしと感じとった彼らが悩んだことは当然といえる。自分たちの将来を曲をヒットさせることに託したのも、また自然の道理だった。

『夕暮れ時はさびしそう』は初めからシングルとして考えていた

「実は……。『夕暮れ時はさびしそう』は、ぼくらの切り札になるとずっと前から思っていました。あの曲を作ったのは、まだぼくらが田舎にいるときだったんですが、あの曲は他の曲とは反応が違ったんです。中

また夏が来る。そろそろサーファー・ガールやレディ・リンダが聞きたくなるな〜〜〜誰が何と言おうとビーチ・ボーイズは偉大じゃあ。
大阪府大阪市　ふーる・おん・ざ・でぃすく

⑬ 富澤一誠のニューミュージック・ヒット曲誕生秘話

村君、平賀君に初めて聞かせたとき、2人は思わず笑ったんです。そのときから、ぼくはこれは面白い反応を呼ぶ曲だなと意識しました。だから、セカンド・アルバムを作るとき曲がたりなくなって、あの曲を入れようかという話が出たときも、いやですと言ってシングル用にとっておいたんです」

天野はそう語るが、中村、平賀も次のように証言する。

「〝ごめん　ごめん〟という言葉と節まわしがとてもユニークでおかしかった。こんな言葉が歌になっていいのか、とぼくはボロクソに言ったのを覚えています」（平賀）

「ぼくも平賀君と同じように感じました。そのときは天野君もなぜかテレ臭そうにうたっていたから、よけいおかしく感じたんでしょうね」（中村）

『夕暮れ時はさびしそう』は、49年7月に発売された。さわやかな印象を与えたオカリナは担当ディレクターの萩原暁氏のアイデアだった。

「これが売れなかったら、3人で自転車をこいで田舎へ帰ろうと話していました」（天野）

そしてヒットにより一まわり大きくなった……。

いわばNSPの賭けだった。その賭けに彼らは結果的に勝つことができた。『夕暮れ時はさびしそう』が30万枚のヒットになったことにより、彼らも人気グループへと成長した。天野が意図したように〝ごめん　ごめん〟に代表されるたたみかけるような節まわしがインパクトとなってたくさんの人々の心をとらえたのだった。『夕暮れ時はさびしそう』のヒットにより、田舎の情景を想起させ、それが聞く者の胸に郷愁を誘う〝叙情派フォーク〟が彼らのイメージとなり売り物になった。

『夕暮れ時はさびしそう』のヒットで、彼らは大きな力を得た。コンサートはどこへ行っても満員になるし、いくらシラケたコンサートでもヒット曲をうたいさえすれば盛り上げることができた。自信を持った彼らは、シングルも自分の好きな曲でいこうと思い始めた。天野は語る。

「『夕暮れ時はさびしそう』の次に、『雨は似合わない』という曲を出したんですが、当然同じラインですね。シングルに関してはディレクターの発言力が強いんですが、その後に出した『お休みの風景』『ゆうやけ』では、わがままを言ってぼくらがやりたいようにやったんです。ところが、残念なことに2曲ともヒットしないではずれてしまった。本当にやばいなと思いました」。

『赤い糸の伝説』では〝泣き〟を意識して作った

続いて51年4月に発売された『赤い糸の伝説』では、当然のことながらディレクターの発言力が増す。「『お休みの風景』『ゆうやけ』はどうもテーマが違うんじゃない。やはりNSPの場合は〝泣き〟の要素がないとシングルとしてはまずい」と萩原ディレクターは言ったという。それに対し、彼らは前2作が失敗しているだけに素直にうなづいた。もっともその背後には、彼ら自身ヒット曲が欲しいという事情があったのだ。

「『夕暮れ時はさびしそう』がヒットしてから1年半ぐらい経っていたので、そろそろここらでヒットが欲しいと思っていました。ヒットがあればコンサートもやりやすいし、ぼくらのアルバムもできるだけたくさんの人に聞いてもらえる。そこで、〝泣き〟を入れた極致ともいうべき『赤い糸の伝説』を作ったんです。そうしたら、これがヒットしまして……」（天野）

草笛を使うというアイデアは萩原ディレクターが出した。

ヒット曲を出すことにより力を得た彼らは、その力を自分たちがやりたいことのために使った。アルバムしかり、コンサートしかり、彼らは自分たちのやりたいようにやった。そうすることにより、着実にマイ・ペースに足場を築いていった。

「ぼくらはアルバムを作ってコンサートをする。できるだけたくさんの人にアルバムを聞いて欲しいし、コンサートに来て欲しい。そのためには、ヒットも出さなければならない。もうそろそろ……と思うのが、なぜか前のヒットが出て1年半か2年ぐらい経ったときですね」

そして新たな切り札とするべく『見上げれば雲か』を発表した

天野が言うように、彼らは『赤い糸の伝説』のヒットから2年後に『八十八夜』を久しぶりにヒットさせた。そしてそれから2年後の今、新曲『見上げれば雲か』をヒットさせようとしている。彼らは新しい時代には新しい切り札が必要だということを知っている。

「やっぱり、切り札ってぼくらにはないんだよ」という中村、平賀の言葉が蘇ってきたとき、ぼくはなぜか2年前に新譜ジャーナルに書いた文章を思い出していた。

〈NSPにワンマンはいない。したがってグループを代表する〝顔〟はない。ひいてはグループの中に〝スター〟もいない。そのことが売れているわけには〝ハデさ〟を感じさせない原因だろう。だが逆に、だからこそ、コンビネーションの良さを保ってグループを長く維持できるとも言える。ひいてはそのことがNSPの魅力となっていると思われる。〉

〈撮影・西尾二葉〉

最近，やたらとオフコースがチューリップ，NSPなどと比較されるが，オフコースと比較できるのは，なんといってもカーペンターズなのだ。
愛知県名古屋市